



知と自由への誘い



京都大学 大学案内 2015

発行 平成26年7月

京都大学 学務部入試企画課

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 TEL:075-753-2521~2524

京都大学ホームページ
<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

京都大学携帯電話サイト
<http://daigaku.jp/kyoto-u/>



Kyoto University Guide Book 2015



京都大学の初代総長木下廣次は、履修科目の選択肢を広げるなど、学生の自立性を尊重した教育方針を採用したことで知られている。京都大学創立後最初の入学宣誓式において、木下は「大学学生に在りては自重自敬を旨として自立独立を期せざるべからず」と述べている。

Message from the President

地球社会の共存に 貢献せんとする 高い志をもつみなさんへ

京都大学総長
松本 紘

本年で創立117年を迎える京都大学は日本を代表する総合大学として10学部に加え充実した大学院や全国一を誇る研究所群も擁しています。また、「対話を根幹とする自学自習」を尊重する特色のある世界最高水準の大学教育を提供しています。これまで累計で196,900名の卒業生を世に送り出し、多くの卒業生が学術分野のみならず、産業界、官界など様々な分野で大いに活躍しています。

みなさんが京都大学で学ぶことはなにもものにもかえがたい経験となるはずで、みなさんは行政・政治・経済の中心から一定の距離をおく京都に暮らし、学生生活を過ごります。世界都市・京都の内懐に抱かれ、千年以上続いた日本の文化や伝統を肌で感じつつ、それを革新していく姿勢を京都の地で学ぶことになるのです。古典から現代先端技術にいたるまでの幅広い知識を身につけ、大局的にものを見、自由に発想できるようになるためには、旺盛な知識欲を満足させる優れた教育環境と学んだことを我が物とする沈潜の時が必要です。現に各界で活躍する卒業生は、京都大学で学んだからこそ、学問を通じて、学問の源流や本来あるべき人間社会の姿というものに思いをはせつつ、確固たる人生の礎を築くことができたと異口同音に語っています。

京都大学においては、人文学、社会科学、自然科学の各分野で様々な独創的な研究がなされています。本学の研究の多様性とユニークさは群を抜いており、霊長類研究やiPS細胞研究などはその一端を示すものにすぎません。京都大学においては1年生からの少人数ゼミ「ポケット・ゼミ」を通じ、独創的な研究を行っている研究者から最先端の研究の手ほどきを受けることができます。

人間は地球上の小さな存在ながら、その行いが地球全体の様相を変え得る可能性を秘めた存在です。その可能性と責任を胸に、将来世界的なリーダーとして地球社会の共存に貢献したいという高い志を持つみなさん。自由で知的刺激にあふれた大学、京都大学はみなさんの未来の飛翔のための翼を与える大学でありたいと総長として願っています。



京都大学の基本理念（抜粋）

京都大学は、創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多元的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎に、ここに基本理念を定める。

教育

京都大学は、多様かつ調和のとれた教育体系のもと、対話を根幹として自学自習を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる。

京都大学は、教養が豊かで人間性が高く責任を重んじ、地球社会の調和ある共存に寄与する、優れた研究者と高度の専門能力をもつ人材を育成する。

(平成13年12月4日制定)

京都大学アドミッション・ポリシー

京都大学は、日本の文化、学術が育まれてきた京都の地に創設された国立の総合大学として、社会の各方面で活躍する人材を数多く養成してきました。創立から1世紀以上を経た21世紀の今日も、建学以来の「自由の学風」と学術の伝統を大切にしながら、教育、研究活動をおこなっています。

京都大学は、教育に関する基本理念として「対話を根幹とした自学自習」を掲げています。京都大学の目指す教育は、学生が教員から高度の知識や技術を習得しつつ、同時に周囲の多くの人々とともに研鑽を積みながら、主体的に学問を深めることができるように教養をすることです。なぜなら、自らの努力で得た知見こそが、次の学術展開につながる大きな力となるからです。このため、京都大学は、学生諸君に、大学に集う教職員、学生、留学生など多くの人々との交流を通じて、自ら学び、自ら幅広く課題を探求し、解決への道を切り拓く能力を養うことを期待するとともに、その努力を強く支援します。このような方針のもと、優れた学知を継承し創造的な精神を養い育てる教育を実践するため、自ら積極的に取り組む主体性をもった人を求めています。京都大学は、その高度で独創的な研究により

世界によく知られています。そうした研究は共通して、多様な世界観・自然観・人間観に基づき、自由な発想から生まれたものであると同時に、学問の基礎を大切に研究、ないし基礎のものを極める研究であります。優れた研究は必ず確固たる基礎的学識の上に成り立っています。京都大学が入学を希望する者に求めるものは、以下に掲げる基礎的な学力です。

1. 高等学校の教育課程の教科・科目の修得により培われる分析力と俯瞰力
2. 高等学校の教育課程の教科・科目で修得した内容を活用する力
3. 外国語運用能力を含むコミュニケーション力

このような基礎的な学力があってはじめて、入学者は、京都大学が理念として掲げる「自学自習」の教育を通じ、自らの自由な発想を生かしたより高度な学びへ進むことが可能となります。

京都大学は、各学部の理念と教育目的に応じ、その必要とするところにしがたが、入学選抜における教科・科目等を定めており、望ましい基礎的な学力を備え、京都大学の学風と理念を理解して、意欲と主体性をもって勉学に励むことのできる人を、国内外から広く受け入れます。

CONTENTS

2 京都大学人物伝

京都大学の教育

- 6 アカデミック・カレンダー
- 8 京都大学の教育システム
- 10 京都大学の教養・共通教育を担う「全学共通科目」
- 12 ポケット・ゼミ

学部紹介

- 20 総合人間学部
- 24 文学部
- 28 教育学部
- 32 法学部
- 36 経済学部
- 40 理学部
- 44 医学部 医学科
- 48 医学部 人間健康科学科
- 52 薬学部
- 56 工学部
- 60 農学部
- 64 Student voices

教育を支える施設

- 68 情報環境機構
- 69 図書館

さらなる飛躍を支援

- 70 国際交流
- 72 大学院進学
- 74 就職支援

学生生活サポート

- 76 学生生活を支援する制度や施設
- 80 クラブ・サークル

京都大学のすがた

- 82 京都大学について
- 84 オープンキャンパス
- 85 京都大学説明会・京都大学入試フェア・大学合同説明会

入試関連資料

- 86 入学選抜実施状況について
- 87 合格者 最高点・最低点 多様な入学制度
- 88 出身高校等所在地別 志願者・入学者数

教員の研究テーマ紹介

- 90 教員の研究テーマ紹介

お問い合わせ・その他

- 113 入学選抜要項・学生募集要項の請求方法
- 114 キャンパスマップ・交通案内

Focus

京都大学人物伝 Outstanding Kyoto University Graduates

人間に迫る歌声合成技術、
の世界を拓く

VOCALOID2搭載「初音ミク」の衝撃的な登場は音楽表現に革新をもたらしました。世界が評価する歌声合成エンジンの開発者、剣持秀紀さんに
終わりになく続く探究の支えについてお話をいただきました。

京都大学で培った強靱な探究心と
のめり込み体質で
音楽表現の世界を新たなステージへ波動に関する研究知識を役立てた歌声合成技術
VOCALOIDが生まれるまで

京都大学大学院では電波の研究をしていたこともあり、ヤマハ入社後はアクティブノイズコントロールの開発に携わりました。不要なノイズを打ち消すために逆位相の音を生成して出力するという技術です。その後、L&H Japanという会社に出向しました。音声認識・合成技術の先駆者でもあったベルギーのL&H社とヤマハとの合併会社です。音声認識や音声合成に関する素養はこちで身につけました。

ヤマハへ帰ってきて、さて何をやるかということでもえられた課題が歌の合成です。

当時、音楽づくりの主流はシーケンサーやMIDIに移行してきており、あらゆる楽器の音をコンピュータで再現できるようになっていました。歌声だけが取り残されていたという状況だったのです。歌声を打ち込みでつくりだすことができるようになれば、音楽表現が広がり、当然新しい需要も生まれるはず。ならば、かつてないクオリティを目指そうということで開発がはじまりました。

歌声を含む“変化する要素”こそ人間らしさ
これをいかに再現するか

VOCALOIDでは、人間の歌声の“断片”をデータベース化し、テキスト入力を通じてつなぎ合わせることで“歌わせる”ことを可能にしています。今や当たり前の手法なのですが、そこに至るまでが難しかったですね。

歌には“伸ばし音”があって、そこがきれいにつながらないと歌声として成立しない。だから、なんとかつじつま合わせをしなくちゃならない。しかし、声帯の微妙な振動をはじめ、呼吸の動きや共鳴など、変化する要素もそこにある。この変化にこそ人間の歌声のエッセンスが詰まっているんです。歌詞として聞き取れるようにしながら、音のつながりを自然なものにしていく。このつなぎ合わせ方が焦点でした。

「突き詰めたい」という気持ちが支える
終わりになき開発作業

もうひとつ重要なポイントがタイミングでした。例えば『サー』と歌い出すことを考えると、楽譜どおりの場所でびったり声が出るのではなく、その100～300ミリ秒前に、すでに『s』という音が出始めています。単純に言えば、音符よりも先に音を出さないといけない。作業をする側は音符に合わせて歌詞を入力すればよいのですが、その裏では、入力されたテキストを発音記号に変え、それに適合する音声の断片を呼び出してきて合成し、音符通りのタイミングで音が出るよう時間管理をしながら発音させる、ということをやっているわけです。

連携いただいたクリプトン・フューチャー・メディア株式会社による「初音ミク」のヒットもあってたくさん評価をいただきましたが、解決すべき問題や改良の余地もまだまだあります。「人間の歌声にしか聴こえない」というレベルへ持っていくにはゴールのない作業になりそうですが、突き詰めていきたいと考えています。

タフな探究心を支えているのが
京都で過ごした学生生活

高校は、サッカーでも知られる静岡県立清水東高校でした。志望校として京大を意識したのは2年生の頃でしょうか。当時、受験情報は赤本くらいしかなかったのですが、そこに「自由の学風」と書かれていて、つよく惹かれたことを覚えています。たまたま、中学、高校の修学旅行が京都で、いい街だなあと思ったこともあり、部活でオーケストラをやっていたので交響楽団のある大学に進みたかったのです。

勉強はそれなりに努力をしたつもりですが、現役での受験は失敗をしました。でも、これがよかったのかもしれない。大学の雰囲気も味わえたり、下宿の案内などもあって、入学後の生活が明快にイメージできた。絶対に行くぞ！と覚悟を決めて頑張ろうと思ったのです。その後

一年の宅浪を経て入学しました。

自由な時間をどう使うのか
京大での日々の暮らしがかけがえのない
財産になる

入学後は、いろんな本を読んだり、友だちの下宿へ行ってまだ珍しかったCDで音楽を聴いたり、お酒を飲んだりしていましたね。本当に毎日が新鮮で楽しかったです。とくに、本は社会人になると読むまがなくて。学生時代に読んだ物が今でも実家の書架に並んでいますけど、すごい量です。本当によく読んだなあと思います。専門書以外にもたくさんあります。とくに1回生の頃は、憲法の授業を受けたこともあって、法律関係の本ばかりを読んでいたね。わざわざ厳しい先生の授業を選んで、ほぼ毎回出席してレポートもちゃんと出した。一時は法学部への転部まで考えたこともありましたが、法学部の先輩と話をしたら、とてもじゃないけどついていけないと思って諦めた、といったこともあります。でも、そのおかげで、今の仕事での契約業務だとか、音楽に関わる著作権などについて正しく理解できているのだと思います。

「自由の学風」の言葉通り、自分が興味を持ったことなら、どんな分野でもじっくりと掘り下げていける、知のストックであり、人的ネットワークをはじめとした環境が整っているのでしょうね。周りには、農学や法学、医学部など専門外の人間もたくさんいて、飲みながら馬鹿話するだけでも刺激になっていたんだと思います。友人や知識、経験など、得たものの価値は計り知れないでしょうね。

京都大学音楽部交響楽団通称京大オケで
鍛え上げた“のめり込み体質”

合格を確かめたその足で京大オケの門を叩き

ました。

「ここへ入ったらまともに卒業できるなんて思わないように」と当時はまだ数少なかった女性の先輩に怖い顔でいわれました。でも、それが冗談ではないと思えるほどすごい奏者が揃っていましたね。

4回生のフルートの先輩は卒業後、名古屋フィルに就職してプロになりました。今は都響で首席奏者をやっています。芸大を受け直して指揮者になりその後音大の先生になった先輩もいらっしゃいます。

当時、吉田寮の近くにあった練習場は24時間開放されていて、都合のいい時に思う存分練習することができたんです。夜中に行っても練習している人がいました。僕も最低でも一日3時間はヴァイオリンを弾いていましたね。今思えば、自然に気持ちと体がのめり込んで行くような環境だったと思います。

休憩の合間には先輩たちと楽曲を分析したり、音づくりについて話し合ったり。純正律や平均律といった音楽の原理みたいなものも自然と身につきましたね。なによりも音楽というものはつねに同じところになくて時間とともに変化していく、その変化にこそ肝があるという、今に通じる課題を意識できたのだと思います。

ただ、のめり込みすぎて一年留年したことは想定外でした。

心を入れ替えて勉強
そして社会の研究開発現場へ

最低でも学部は卒業しないと、と集中して勉強をはじめたら専門分野がだんだん面白くなってきたんですね。もう少し勉強してみようと思って院試を受けたら通った。

大学院での研究は、科学衛星あけぼので観測された波動についての研究です。衛星のデータ

が届く相模原の宇宙科学研究所へは、僕も年に何度か行きました。いろんな大学と一緒に研究していたので、当番があったのです。

衛星の都合なので夜中に起きることもしばしば。案ではありませんでしたが、宇宙とつながる感覚を持つことができました。いい機会、いい経験になったと思います。

2年の修士課程を経て、ヤマハへ。そして今日に至ります。

最高の環境で、最高の学生時代を

色んな人にめぐり合えて、みんなが今それぞれの場所で活躍している。その彼らとある時期を一緒に過ごせたことは僕にとってかけがえのない財産になっています。

全国から集まった人たちが、京都大学という器のなかで醸し出し続ける、自学自習の気風、つまり“自ら探求する”という空気。この空気にどっぷり浸った7年間が今の僕を支えていると思います。

皆さんにもこうした経験をこの大学でもらえたらと願います。

これは余談ですが、剣持家では僕が食事当番なんですよ。というのも、学生時代は自炊で色々作っていましたが、オケの仲間なんかを呼んでご馳走していましたからね。苦にならない。

毎朝6時に起きて15分くらい朝食をこしらえ、夕飯の準備をしてから新幹線で東京のオフィスへ向かう。今日は娘がお弁当を持って行く日だったので、お弁当を作ってきました。料理は工夫が活かせますから楽しいですよ。

地方から出てくる男子学生は特に料理の腕を磨いてください。共働き率も100%に近づく時代ですからね。結婚したらきっと幸せな家庭を築けるはずですよ(笑)

A world of new discoveries Vol. 1

ヤマハ株式会社 剣持 秀紀

1967年、静岡市生まれ。京都大学工学部卒業、同大学大学院修了。在学中は京都大学音楽部交響楽団にヴァイオリン奏者として所属し、数々の演奏会に出演。1993年ヤマハ株式会社入社。1996年エル・アンド・エイチ・ジャパン株式会社出向。1999年ヤマハ株式会社復職。歌声を含む音声信号処理の研究開発に従事。現在、yamaha+推進室VOCALOIDプロジェクトリーダー。

Focus

京都大学人物伝 Outstanding Kyoto University Graduates

新本格派ミステリー、
の世界を拓く『十角館の殺人』でのデビュー以来27年。
つねに「想像を痛快に超えた結末」で読者の心をつかみ続ける綾辻行人さんの
小説家への道のりと京都大学との関係について伺いました。在学中に書き下ろした作品で
ミステリー界に新時代をもたらす
以来、つねにファンの心を離さない
人気作家の生き方と京都大学子供の頃は、読んでは書くの繰り返し
創作は模倣欲求から始まった

小学校4年生の頃、江戸川乱歩やモーリス・ルブランの本でミステリーと出会って、すっかりその面白さの虜になったんです。初めて小説を書いたのは6年生の時。好きな作品と似たものを自分でも創ってみたい、という模倣欲求からです。ミステリーには分かりやすい定型があるので、何かトリックを思いつけば自分にも書けそうな気がしたわけです。

中学の頃はSFに熱中して、やはりそれに似たものを書いていました。高校生になると、自分の内面を暴き出すような純文学風の小説も書きましたが、最終的な目標はつねにミステリーだったんです。ただ、将来はミステリー作家になるんだと言っても周囲は誰も取り合ってくれなかったし、自分でもその難しさが分かってきていたから、学業を終えたら何か正業に就く傍らで書き続けて、選層までに1冊でも本が出せれば本望かなと、そんなふうには思っていたんです。

京大の志望動機は、近くて安い地元の国公立大学

生まれも育ちも京都市内、西京区の桂で、とくに裕福な家でもなかったため、通いやすく学費も安い国公立大学を志望したわけです。京都の公立高校は当時、居住地によって進学先が決まる小学区制で、学校間の格差がなかった。有名大学志望なら公立はだめ、なんていう声もあったんですが、気にせず府立の桂高校へ行きました。結果として、どこにいても要は自分の頑張り次第なのだ分かりましたね。受験勉強には通信添削を利用しました。空間的に縛られない、締切までゆっくり問題を考えられる、というのが、塾や予備校へ行くよりも僕には向いていたんだろうと思います。

勉強はそれなりに真面目にやっていたけれど、いわゆるガリ勉ではなかったですね。当初は法学部志望だったんですが、興味が“人間の作った制度”から“人間のもの”

に移行して、それで教育学部を選んだんです。

入学と同時に、推理小説研究会に入会

入学してすぐに京都大学推理小説研究会、通称「ミステリ研」に入りました。赤本で、大学の公認団体として記載されているのを見つけて、思わず丸印をつけたものです。インターネットもない当時ですから、ここに入れば同好の士が大勢いて、存分にミステリーを語り合えるに違いない、と期待したんです。合格したら必ず入会しよう。と思いつくと、それが京大を志望した最大の動機だったのかも知れない(笑)。

実際に入ってみると、思っていたよりも創作が盛んだったので驚きました。ただ、作家志望を公言するのは僕くらいだったんですよ。大半はちゃんと卒業して、普通に就職を。法学部生が多かったから、司法試験を受けて法曹界をめざす人もかなりいましたね。

4回生の春に体調を崩して、早々に留年を決意したんです。で、卒論に取り組む同回生を横目で見ながら書いたのが『十角館の殺人』の原型となる長編だった。

5回生の時、法月輪太郎くんや我孫子武丸くんが「作家志望です」と言って入会してきて、やっと仲間ができて、いつかは“ミステリーの梁山泊”みたいな感じでした。といっても、誰もまだ、自分たちが将来、本当にミステリー作家になれるとは思っていなかったんじゃないかな。まあ、それくらいリアリティの希薄な志望だったんですよ。

ところが、僕が26歳でデビューしたのを契機に、彼らも次々にデビューして、みんな作家になってしまった。さまざま偶然が重なった結果とはいえ、あの時期の展開にはわくわくしましたね。

自由の学風、のめり込める環境、それが京大

伝統として今も残っていると思いますが、まさに自由の学風でしたね。勉学に限らず、好きなことに好きなように取り組める“場”が、学内の至るところにあった。全国か

ら面白い人材が集まってきている、という点もやはり、“場”として貴重でした。

僕はミステリ研以外にもいくつかのグループに所属していて、ひとつは軽音楽のサークルだったんです。バンドを組んで、ライブハウスで自作の曲を歌ったりしてました。もうひとつは麻雀(笑)。当時は大学生の麻雀人口、多かったんですよ。週に何度かは徹夜で麻雀を打って、バンドの練習をして、一人になったらミステリーを読んで書いて、という学生生活でした。

いつ勉強してたんだと叱られそうですが、でも、それら全部に全力で打ち込んでいたわけですから、かなり密度の濃い毎日だったといえます。音楽にしても麻雀にしても、学生時代に熱中したことほとんどが、今の仕事に繋がっているんですよ。

大学院での研究とミステリーの執筆
二足のわらじながら遂にデビュー

4回生の冬、江戸川乱歩賞に応募したんです。初めての応募で、一次選考を通過。250作の中の50作、くらいだったのかな。これなら社会人として働きながらも、努力をすればいつかは本を出せるかもしれない、という感触を得られたので、来年は卒業してどこかに就職しよう、と決めていたんです。

ところが留年して5回生になる直前、教育社会学研究室の当時の助手の方から、「きみ、才能がありそうだから大学院においてよ」と誘われて。それで僕、単位も足りてない状況だったのに、すっかりその気になってしまった。院に残ったほうが小説を書く時間に不自由しないだろう、という判断もあって、そこから猛然と院試の勉強を始めたのでした。

2年間の修士課程を経て、博士後期課程2回

生の秋に『十角館の殺人』を上梓する機会に恵まれました。でも、本を1冊出せば「作家」に就職できる、という世界ではないんです。自分の本が売れる保証なんてどこにもありませんから。院で社会学を研究しながら小説も書く、という二足のわらじ生活が、その後もしばらく続くことになりました。

転機となったのは留年がもたらした
大学5年目の1年間

卒論提出の直前、ひよんなことで島田荘司さんという小説家の先輩と知り合ったんです。原稿を読んでいただいたところ評価してくださって、出版社を紹介いただいて……結果、『十角館の殺人』を世に出すことができた。

思えば、留年したあの1年が大きな転機でしたね。

院に誘われての猛勉強、島田荘司さんとの出会いと交流……あの1年でその後の人生が決まった感じ。慌てずじゅっくり、という空気が当時の京大にあったおかげ、ともいえますね。その空気は今でも残っているんじゃないでしょうか。

小説家として生きていく決意

デビューしたのは大学院在学中で、研究を続けながらも年に2冊のペースで長編を発表できていたから、これならミステリー作家として何とかやっていけるかなと、ちょうど思いはじめていた頃です。

二足のわらじゆえに大変な時期もありましたが、大学院に居場所があるという事実は精神衛生上、良かったように思います。それを許容してくれる雰囲気も研究室にあって、ありがたかったですね。で、最後は「独り立ちしなさい」と背中を押してくれたように思います。

A world of new discoveries Vol. 2

ミステリー作家 綾辻 行人

1960年、京都市生まれ。京都大学教育学部卒業。同大学大学院修了。小学校6年生の夏休みに初めての短編推理小説を書く。京大入学後は推理小説研究会に所属。大学院在学中の87年、『十角館の殺人』でデビュー。その後、『館』シリーズを中心にミステリー界をリードし続ける。他に『緋色の囃き』などの「囃き」シリーズ、近著には『深泥丘奇談』『Another』『Another エピソードS』等がある。92年、『時計館の殺人』で第45回日本推理作家協会賞を受賞。

大学は自分の一生を支えていく
大切な価値をみつけるところ

27年もこの仕事をしていると、小説家はなることよりも長く続けることこそ難しい、と痛感します。壁に突き当たるとは？とよく聞かれますが、楽に書けたためしもなく、つねに四苦八苦しています。デビュー以来、売れない時期がなかったのは非常に恵まれたことなんですが、京大のミステリ研出身の作家はみんな、それぞれに高い評価を得てずっと一線で活躍しています。不思議というか、稀有なことですね。

むしろ、人生にはここを突破したらあとは楽になる、なんていう法則や理論はありません。方程式が通用するのは大学受験まで、ですよ。大学卒業後は、これを達成すれば必ずこれだけの評価が得られる、とは限らない世界が無限に広がっていて、否応なくそこに放り込まれます。大学受験はもちろん大変だと思うけれど、今のうちに努力相応の評価が得られる世界を満喫しておいてほしいですね。

社会に出てから向き合う問題のほとんどには“答え”がありません。小説も同じです。どういう作品を書けば多くの読者が面白がってくれるか、売れるか、なんて計算できない。公式がない。それでもその中で一生懸命にやっていくしかない。自分はこれが好きだと思いつける情熱や、これは譲れないという気概があるからこそ続けられるんですね。大学はそれを見つめるための“場”であるべきでしょう。自分にとって大切な価値を見出し、生き方を構築していく上で、京都大学は実に得難い、素敵な環境だったなあと、振り返ってみてそう思います。